岸田今日子ファンタジー
田今日子
ひとみしりな入江

ひとみしりな入江

1978年11月10日　第1刷発行

著　者　岸田今日子　©1978
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口1-33-4（〒112）
電話03-203-4511　振替東京6-64227
印刷所　平河工業社
製本所　ナショナル製本

装　幀　高麗隆彦
装　画　東　逸子

980円　1393-860010-4406

223270

ひとみしりな人注

# ひとみしりな入江　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ミッシェル　7
沼で　17
悲恋　23
七匹目の仔山羊　33
いつもの夏　45

ひとみしりな入江　53
縞が似合う女　71
風が…　77
絵日記　89
いばら姫またはねむり姫　95

ミッシェル

一昨年の、未だ十一月に入ったばかりだというのに、やたらに冷え込む夕方だった。会社から帰ってアパートのドアを開けると、ダイニングキッチンの、いつも私が坐る椅子に、私のガウンを着てイルカが坐っていた。

イルカは、私を全く無視してテレビの相撲中継を見ているものだから、私も挨拶したものやらどうやら迷ってしまって、夕食の仕度をしている妻にそっと訊いてみた。

「あれ、だれだい」

妻は振り向きもせず、

「ばかみたい」といった。

「見れば判るでしょ。イルカに決まってるじゃないの」

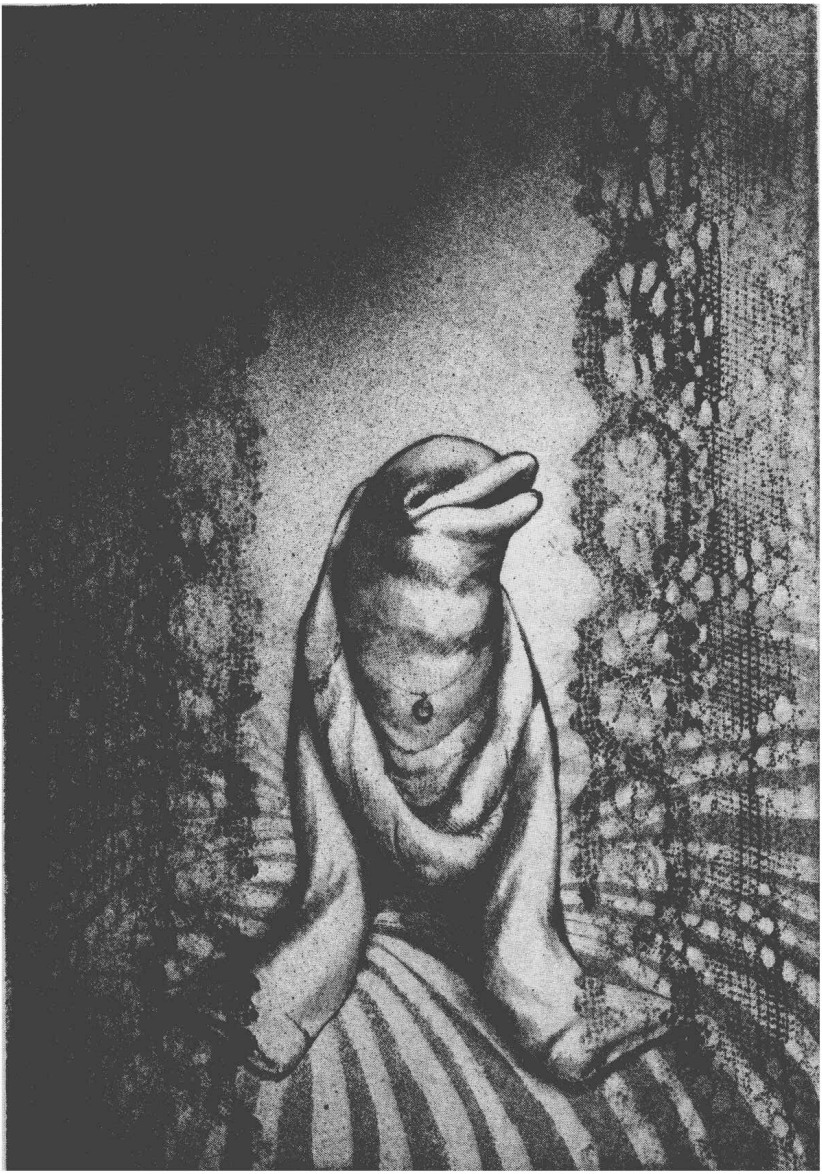
「だけどさ」と私はいった。

「俺のガウン着てるぜ」

「いいじゃないの、一日位貸してあげたって」妻の声は少し尖って、

「今日は買うひま無かったんだから。いやあね、ほんとにケチね、男の人って。ごめんなさいね、ミッシェル」と急に甘い声になったので、私は少し驚いた。イルカは、ミッシェルという名前だったのだ。

妻は、前からペットを飼いたがっていた。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

我々夫婦は結婚して十一年になるが子供が無くて、それが私の、少年時代のおたふく風邪のせいだと判ったものだから、この問題に関して私は肩身の狭い思いをしている。

ところが、「犬猫を飼うことを禁ず」のアパートにしか住めないのも又、私の甲斐性がないためだといわれれば、たしかにそうかもしれないと思わざるを得ない。このところしばらくその話題が出なかったので、妻もいい按配に諦めたのかと思っていたら、いつの間にか駅前の山北鳥獣店に相談を持ちかけていたのだった。組立てのソファベッドがもう届いていて、四畳半の方がミッシェルの部屋ということになった。

妻は昂奮状態でミッシェルの世話を焼き、機嫌のいい妻を見るのは久しぶりで、私も悪くない気持ちだった。

ミッシェルは朝と夕方、薄い塩水の風呂に入るだけで、あとはソファに寝そべってうつらうつらしているか、テレビを見ている。

「イルカってのは、あんなに水の外に出ていていいもんかね」と妻にいったら、

「ばかみたい」といわれた。

「そういう種類のイルカだから、うちで飼えるんじゃないの。それともプールつきの家に住む予定でもあるの」

食べものはさすがに生魚が主で、しかし生きていなければなどと面倒なことをいわないと

ころが、実にいじらしいのだそうだ。私達の方も従って肉を食べることは殆ど無くなった。

「お肉の高いったらないんだから、本当にミッシェルは経済観念が発達してるのよ」

と、妻はとくとくとしていう。しかも、普通のイルカだったら魚だけしか食べないはずなのに、ミッシェルはお米や野菜も食べるように育てられている。だから我々と同じものを同じ分量食べるだけで、殆ど手がかからないのだ。例えばアジの塩焼きの場合、我々夫婦が二匹ずつでミッシェルは三匹だが、ミッシェルの分は焼かなくてすむから、それも当然なのだった。

ミッシェルが好きなテレビは、スポーツ中継と、なぜかお料理番組で、体を乗り出すように熱中して見ている。アイスホッケーでパックがゴールに入った時とか、出来上った料理が盛りつけられて映し出される時とかは、手を叩かんばかりに喜んで身をよじるのだ。「ケッケッケッ」と引き笑いに似た声を上げて、普段は全く無表情に見える小さな丸い目が、急に生き生きと光ってくる。

「やっぱり、余り言葉と関係なく見られるところがいいんだろうな」

というと妻は急にむきになって、

「ミッシェルは言葉なんか殆ど全部判ってるのよ。此の間だって、『欽ちゃんのドンとやってみよう』を見て笑ったじゃないの」という。

逆らうと又面倒なので黙っていたが、あれは欽ちゃんがコントを読み終って、舞台をスーッと滑るように歩いた、あの格好がおかしかったから笑ったのだ。しかし不思議なのは、「わんぱくフリッパー」はイルカが主役だからと思って見せても、余り興味を示さないことだ。

「幼稚すぎるんじゃないの」

と妻はいうが、我々大人が見てもかなり面白く出来ているのだから、やっぱりイルカはイルカで、ドラマを解する情緒は乏しいのだろう。そして、生れた時から鳥獣店に引き取られて、他の動物と一緒に育てられたものだから、自分がイルカの仲間だという意識が余り無いのだろう。思えば海という故郷がありながら、こんな二ＤＫの檻の中に閉じ込められて身動きも出来ない、可哀そうな奴だ。そう思ったら、何となく情が移ってきて、余り好きになれなかった例の引き笑いも気にならなくなった。

しかし一度だけ、ミッシェルのことで妻に文句をいったことがある。

或る晩、寝床に入ったところ、どうもふとんがしめっぽい。妻に聞いてみると、ミッシェルがいつもソファベッドでは落ちつかないだろうと思って、こっちの部屋で昼寝をさせてやったということだ。

「いいじゃないの。ちゃんとシーツは取り替えたし、私のふとんなんだから。あなたが自分のと私のと間違えて敷いちゃったのよ」

と妻はいった。そういわれればたしかにそうだが、しかし妻にしたって、しめっぽいふとんで寝て風邪でもひいたら大変だ。もしこっちの部屋で昼寝をさせたいなら、ミッシェルを余程よく乾いたタオルで拭くか包むかしてからにしなさいと、私は妻にいい聞かせた。妻はふくれっつらをして、

「イルカをよく乾かすなんて馬鹿げたこという人、はじめて見たわ」

などと口答えをしたりしていたが、その後、ふとんがしめっていることは無かったから、私がいう通りにしたのだろう。口だけは達者だが、可愛い所もある女なのだ。

ミッシェルを飼っていることがアパートの人達に知れた時、一時は問題になったらしい。『同じ屋根の下で快適に暮すために前向きに話し合う会』の代表が二人、私の留守中に訪ねて来たということだ。けれどもミッシェルの生活様式や、その落ちついた物腰に、すっかり感動して帰って行ったという。

「そりゃそうよね、犬みたいに吠えるわけでも、猫みたいにひっかくわけでもないし。私ね、大きな金魚を飼うのと、どう違うんでしょうか、っていったのよ」

と、妻は未だ昂奮さめやらず、私に向かってミッシェルの美点を並べたてた。私にしたって、ミッシェルの存在が社会に認められるのは悪い気持のものではない。ミッシェルは何時ものように、どこが面白いのかという顔で歌謡番組を見ていた。

アパートの窓から見える公園の、一番おそ咲きの桜が散る頃には、ミッシェルは確実に家に来た時の二倍の大きさになっていた。妻はミッシェルが喜ぶ料理番組の真似をして、その通りに毎日作って食べさせるものだから、栄養が行き届いて体はいつもつやつやと光っている。魚の数も、我々が二匹の時はミッシェルが四匹というように変ってきたが、体の大きさから考えれば無理もない。

「それにしても、少し運動させないと苦しそうになってきたぞ」というと妻は、

「運動なら……」といったまま、しばらく黙っていたが、何だか赤くなったように見えたのは何故だか判らない。

「どこでさせるのよ。公園でキャッチボールでもするんですか」といった時は、もう普段の妻に戻っていた。

夏になった。私は一大決心をして会社の同僚にワゴンを借り、ミッシェルを海水浴に連れて行くことにした。この計画を打ち明けた時の、妻の顔は忘れられない。心底、私を見直したという表情だった。

私たちは千葉の海岸へ行って、モーターボートで沖へ出た。物好きな人の眼を避けて、そこでミッシェルを水の中へ滑り込ませてやった。

「ゆっくり泳いでおいで。疲れたら直ぐ上るんだよ」

ミッシェルの小さな丸い眼に、一瞬、何が起ったのかといぶかるような色が走ったが、とにかくミッシェルは海に沈んで、そして二度と姿を現さなかった。

海上保安庁にも届けたが相手にしてもらえず、妻は眼を泣き腫らして何日か砂浜に坐り続けたあげく、やがて諦めたようだった。

「ミッシェルが泳げないかもしれないってこと、なぜ私たち、判ってあげなかったのかしら」と、妻は涙ながらにいった。

「もしかすると、野性に目覚めて故郷へ帰ったのかもしれないよ」と、私は映画のうたい文句のようなことをいってみたが、その意見は余り妻に気に入られなかったようだ。

「ばかみたい。私があんなに何日も海岸に居たんですもの。そういう時は必ずお別れに来るはずよ」

それもそうだと思って私は、ミッシェルに関して余計なことをいうのはやめた。

それから三ヵ月ほど経って、もう十月も末だというのに、妙に生暖かい夕方だった。会社から帰ってアパートのドアを開けると、ダイニングキッチンの、いつもミッシェルが坐っていた椅子に、バスタオルを羽織ってだれかが坐っていた。私は聞くまでもないとは思ったものの、夕食の仕度をしている妻に、やっぱりそっと訊いてみた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com